

火屋勤行（ひやごんぎょう）

火葬場にて茶毘にふす前に勤めます。

①重誓偈（じゅうせいげ）…仏説無量寿経に説かれて
いる法蔵菩薩の四十八願を要約した、五言四四句の短
い偈文です。

②会葬者焼香

*火葬のあとは収骨し、お骨の一つをお寺に納骨して
いただきます。この間、ご遺族の方には式場やお寺お
参りの際、お疲れ出ませんようお過ごし下さい。

《参考》

お焼香（合掌礼拝）について

浄土真宗本願寺派での立ち焼香の作法は左記の通
り。会葬者はそれぞれご宗旨における作法に従います。
・左手に念珠を持ち、焼香卓の手前に来て本尊に一礼。
・二三歩進んで、お香を右手指でひとつまみし、その
まま一回のみ香炉へ焚べる。額に押し頂かない。
・念珠を両手につまみ（親指と人差し指の間）胸の前で
合掌し、「なんまだぶ」とお念仏を口に称えながら礼

拝し（約四五度）、おもむろに戻して合掌の手を直す。

・二三歩下がって一礼し、自席に戻る。

*導師に合掌する必要はありません（一礼のみ）。

法名について

浄土真宗には戒律がないので、戒名とは言わず「法
名」と言い、仏弟子となった名告りです。門主以下僧
俗誰もが「釋○○」と二文字で、釋はお釈迦様の仲間
となったという意味です。帰敬式にていただき、地方
では女性は慣例的に「尼」を付けることもあります。

七日参り（中陰）について

インド古来の輪廻思想に基づいた仏事儀礼として、
日本各派においても命日より毎週、七週目の満中陰（忌
明け）までお仏壇にて勤行を致します。浄土真宗の上
では往生即成仏であって追善供養の意味ではありません
んが、葬儀後の後始末、お墓や仏壇のことなどご相談
をお受けしたり、故人亡き後のお気持ちの整理につい
ても大事な期間です。但し日程などは臨機応変で。

ご参拝の皆様へ

浄土真宗（本願寺派）の通夜・葬儀式

についての簡単な解説



恩愛はなはだたちがたく

生死はなはだつきがたし

念仏三昧行じてぞ

罪障を滅し度脱せし

娑婆永劫の苦をすてて

浄土無為を期すること

本師釈迦のちからなり

長時に慈恩を報ずべし

「高僧和讃」親鸞聖人



作成：報恩寺・林 暁 令和二年改
ご不明な点はお尋ねください。T0778516064

■浄土真宗は親鸞聖人（一一七三〜一二六二）を開祖とし、「仏説無量寿経」「仏説観無量寿経」「仏説阿弥陀経」の浄土三部経、聖人の著作である「正信念仏偈」などを聖教とします。ご本尊は阿弥陀如来（または六字名号〓南無阿弥陀仏）で、阿弥陀仏が衆生救済の願いによって建立した世界を西方極楽浄土と言います。

浄土真宗の仏事は死者への供養ではなく、阿弥陀仏への報恩の行という意味での勤行であり、故人の生前の徳を偲びつつ、浄土往生を遂げ仏になられた命に対して礼を尽くします。よって死者の解脱をはかる引導作法や、追善回向の作法は行いません。念仏者はすでに往生が決まっているので、遺体の上に刃物を置く習慣や、死装束、葬儀の後の「清め塩」なども用いられません。

かつては自宅にて出棺勤行をし、火葬場や埋葬場所に移して葬場勤行を行なっていました。現在は多く齋場で葬儀を行うため、齋場にて出棺勤行と葬場勤行を（または引き続き火屋勤行も）勤め、火葬場に向かいます。宗教儀礼であるので告別式（お別れの会）とは言いません。

②法話

③御文章（ごぶんしょう）…室町時代、八代目・蓮如上人が書かれたお手紙の中から拝読致します。

帰敬式（ききょうしき）・おかみそり

「仏」「法」「僧」の三宝に帰依し、仏教徒として新たな人生を歩むことを誓う儀式。生前に本山・西本願寺または菩提寺にて受式された方は行いません。

受式されていない方は、葬儀に先立って導師が剃髪
の動作とともに「流転三界中 恩愛不能断 棄恩入無
為 真実報恩者 南無帰依仏・南無帰依法・南無帰依
僧（三帰依文）」と唱えて執り行います。

出棺勤行

①帰三宝偈（きさんぼうげ）…中国の善導大師作「観経疏」からの偈文。すべて人々に、三宝に帰敬し本願念仏の信心をおこすよう勧められます。

②仏説阿弥陀経…極楽浄土の莊嚴や阿弥陀如来・称名念仏の徳が説かれ、日常の仏事によく用いられます。

■また、小規模葬（家族葬）においても儀礼の中身自体は変わりません。肝要はじっくりお吊いの時間を持ち、生死やご縁について心静かに考えてみることに。近年、葬送の有り様も多様化・簡素化の傾向があり、事前にそれらの一長一短を調べておきたいものです。

県内一部地域の回り焼香や、施主家の会葬者へ頻繁な立礼などの慣習は一考し、通夜・葬儀式中は極力自席においてしつかり参列することが望ましいですね。

通夜

ご本尊の前に棺を安置して営みます。本来は、夜通し故人の側に寄り添い、縁者が集ってお話や、読経やお吊いをして最後の日を過ごします。

①正信念仏偈（しょうしんねんぶつげ）…親鸞聖人著作「教行信証」の中の七言二〇句の偈文と和讃六首。阿弥陀如来の由来と、だれ一人残さず救いとるという本願他力の働きや、念仏をインド・中国・日本と伝えてくださった七高僧が讃えられています。真宗各派、僧俗ともに最もよく読誦される勤行です。

葬儀式・茶毘（だび）式

一旦お仏壇を閉じ（本来、仏間や寺院は聞法道場という位置付けであるため）、遺影の上方にご本尊・六字名号を掲示し、莊嚴壇に向き直って勤めます。導師によつては表白（仏事の趣旨）が述べられます。

①路念仏（じねんぶつ）…かつて自宅から火葬場に向かう際、葬列を組んで道中に唱えられました。

②導師入堂〓焼香 *あればその後弔辞の拝受

③正信偈〓会葬者焼香…通常の読み方と少々異なる、古来の「舌々読み」という節を用いることがあります。

④短念仏

⑤添引（そえびき）念仏…葬場で唱えるお念仏で、独特の旋律です。

⑥和讃二首…男女それぞれ、ご往生に関して詠まれた七五調の歌。葬儀用の節です。

⑦回向（えこう）、導師退出

*この後弔電披露や一部地域で火屋勤行と焼香があります。会場によっては生前の映像、棺を下ろしてお花入れなど続き、お見送りの時間となります。これら葬送の慣習・様式は時代や地域によっても異なります。